

馬見二ノ谷遺跡 発掘調査

現地説明会資料(2003年11月8日)

調査機関	奈良県立橿原考古学研究所
所在地	北葛城郡河合町大字山坊字二ノ谷
調査期間	2003年4月21日～11月末日(予定)
調査原因	馬見丘陵広域公園緑道整備
調査面積	約1500m ² (平米)
主な遺構	旧石器を多数包含する埋没谷(自然地形)
主な遺物	旧石器約5,000点
現地説明会	2003年11月8日(土) 10時00分から12時00分
交通	近鉄田原本線池部駅下車、徒歩約10分

1. 旧石器時代の遺跡

およそ12000年前に土器が使われるようになる以前の時代を、旧石器時代と呼んでいます。旧石器時代には、人びとは決まった住居を持たず、一定の範囲を点々と移り住む生活を送っていたと考えられています。馬見二ノ谷遺跡は、そうした頃のキャンプ跡の一つと考えられます。遺跡では、東向きの斜面を削りこむようにしてできた古い谷が南北2カ所で見つかり、これら二つの谷を埋める土砂に、4500点にもおよぶ多量の石器が含まれていました。この場合の“石器”とは、私たちが“ナイフ形石器”などと呼んでいる完成品としての石器だけでなく、そうした石器の素材となるような一定の大きさのかけら(剥片)や、石割りをしたときに生じる細かな破片までも含んでいます。そうした細かな破片が出土していることから、ここで石器づくりが盛んにおこなわれていたことがわかります。

これらの谷を埋めている土層は、北の谷、南の谷のいずれをみても比較的よく似ていて、土砂が堆積して谷が埋まっていく過程は二つの谷で共通していたようです。土層を細かに観察すると何十層にも分けることができますが、出土する遺物の性格などから考えて、おおまかに上下二つに分けて考えることができます。旧石器時代の遺物は、上層、下層のいずれからも同じように出土しますが、上層には少量ながら縄文時代、弥生時代の遺物が含まれています。下層は粘土や砂の細かい土層が多数積み重なった様子が観察でき、おもに水の流れによって運ばれた土砂が堆積していると思われますが、縄文時代以降のものとはっきりわかる遺物は含まれていません。いずれにしても、多量の石器は谷の周囲から土砂とともに運ばれてきたと考えられ、土砂の堆積には旧石器時代に堆積した部分(下層)と、縄文時代以降に堆積した部分(上層)があることが分かります。



調査区と二つの谷

ところで、発掘調査では二つの谷以外の丘陵部分も発掘していますが、旧石器時代の遺物がまとまって出土することはありませんでした。先に述べたように、谷から出土した遺物は本来の位置にあるというより、周囲から運ばれてきた可能性が高いので、それとは別に、石器作りの場所があったはずですが。残念ながら“その場所”がどこであったのか、ということをはっきり示す手がかりはあまりありませんが、二つの谷にはさまれた尾根の部分や、現在は道路となっている調査区の南側などが有力な候補となるでしょう。今後、遺物の出土位置などの情報を細かに分析することによって、明らかにできるかもしれません。



南の谷の土層

